

幼児教育の原点



新井 清三郎

幼児を教育するとは一体、どういうことなのだろうか。まず幼児という人生の芽生えの時期を相手にしていることを

考えると、素質と環境の要因とを比較したときに、どちらに重点をおくべきなのだろうか。能力とか可能性とかいうものを幼児の時期に見きわめたり、さらにそれをのばすことがどの程度までできるのだろうか。それができたように思っているけれども、長い将来にわたってはじめてわかることであったり、われわれがひとりよがりによってしまっていることがないだろうか。また視点をかえてみるならば、われわれ自身の幼児を見る目がくもっていたり、偏っていたりして、たとえ一般的に認められた教育のうえに立

って教育しているつもりでありながら、考え方のものを見直して見る必要があるおこりはしないだろうか。

これらの素朴な疑問を、幼児教育に携わっている人々は、おりにふれていただくことであるが、日常の忙しい保育活動にとりまぎれて、すぐ消え去ってしまったこともあろう。

以上のような問題点をふまえたうえで、次のようなことを考えてみたい。

まず性格形成および性格の構造について簡単にふれ、つぎに性格の基盤となっている気質・体質の傾向について、さらに個体発生および系統発生からみた神経系の成熟・発

達についてのべる。次に視点をかえて、幼児を見る見かた、または子どもの行動を評価する立場に立って、なにが「よりよい」「より本質的な」教育なのだろうか、いいかえれば「よい」子どもとは何をわれわれがさしていつているのか、という評価の視点について反省してみることにする。

性格とか個性とか、パーソナリティとは何をさしていつているのであろうか。心理学や精神医学の学説をひくまでもなく、人間の存在が未知であり、多様であることは、いかえれば、性格の複雑でとらえどころのないことにある。このようなデリケートな主題を簡単にのべることは自体無理であるかもしれない。しかし、一方割切った単純化した形であらわすことによって、問題点を多少とも明らかにし得るかもしれない。このような前提で述べることをまずおこわりしておく。

「ひとりひとりを大切にする」ということがよくいわれる。ふりかえてみると、このいいかたはずいぶん変だな……と感ずる。大体幼児を教育する時に、ひとりひとりの特徴を意識しないで保育ができるだろうか。またその特徴

を尊重しないでひと時も教育ができるはずがない。しかし、またそうであるだけ、平凡なこのことを毎日の保育で実行することがむずかしいし、くりかえしいわれることなのだろう。はじめの「ひとりひとり」とはいいかえれば個性であり、素質であり、また長い世代にわたってひきついできた遺伝的なものの総和であると考えられる。また「大切にする」とは、理解し尊重するという面があるとともに、大切にしたいつもりでありながら、保育者の一方的なおしつけや、思いあがりや、独断、偏見さえ加わっているかもしれない。このように考えると、一方では子どもというもの客観的にみるという点と同時に、子どもを見るわれわれの側の見方そのものに光を当てて、普通何げなしに受取っている保育の態度そのものをふりかえてみる必要がある。

(1) 子どもの性格構造

性格というものを建築物にたとえてみよう。おもてには現われないけれども、土の下にしっかりと根を張った地盤になるものが、あるはずである。すなわちこれを遺伝的な資源といえる。しかし父親からうけついで染色体のなかに

数万とある多数の遺伝子およびその組合せは、必ずしも完全なものではない。むしろいろいろな偏りや欠陥が部分的にあるほうが普通であろう。完全という目でみると、むしろ完べきな遺伝資質を受け継いだ子どもなどは特殊な例外に限られてしまうかもしれない。音楽の才能、数学的、学術的な才能などは何といても遺伝的にうけついで資質であるが、同じ子どもの中に特殊な才能と、性格的な欠陥という点での遺伝的偏りが同居していることを保証できない。この遺伝的基礎構築の土台のうえに、体質や素質の特性が与えられる。

「生れつき……」のことは必ずしも狭い意味の遺伝だけでなく、受胎後の個体の発生期間をふくめて、出生の関門をくぐりぬけてきた個体のもっているある運命的な道すじを示している。どのような生活環境が与えられたとしても一生活ちつづける自律神経系の特質とか、体質傾向とか、体型の特徴などは、この問題に関係している。またこのような体質、素質的な傾向と平行して、気質の特徴が現われてくる。たとえば陽気だとか、お天気やであるとか、ユーモラスで楽天的だとかいうような気質は、かなり体質的に規定されているものであり、シエルドンやレッツェマ

ーなどの学者が昔から指摘している通りである。

デリケートで感受性の強い、慎重で神経質であるというような気質傾向と、きゃしゃで敏感で、時によるとアレルギー体質や自律神経の不安定傾向を伴ったものを脳神経型（発生学の方面から外胚葉型）といったり、その反対のあけつびろげで、大らかな、感受性の鋭くない気質傾向と、肥満した、睡眠、食事などの点でも問題の少ない子どもを内ぞう型（内胚葉型）といったり、またそのいずれとも多少異なった、しん棒強い、粘着性の、物にこだわること多い、筋肉質の気質、体質傾向をもったものを筋肉運動型（中胚葉型）というようにいつて分類しているのはシエルドンである。このような比較的簡単な類型化をしてしまうこと自体問題であって、生きた子どもたちは決してこのように簡単な動かない類型に分けられるものでないことはわかりきったことであるが、他方で、やはりこのような区分けをすることによって保育の方針をたてるうえでひとつの目安となることも否定できない。

(2) 脳の成熟

前にのべた気質、素質の基礎のひとつに脳の成熟のこと

がある。脳（中枢神経系統）は受精卵が分割、分化して組織ができてくるいわゆる個体発生の方面と、他方数十万年以前にさかのぼることのできる霊長類の発達段階で進歩してきた、いわゆる系統発生の方面とがある。たとえば、ホモ・ファール（材料をあやつることのできるということが人類の特質のひとつであるという）という面からみれば、大脳の頭頂葉（ローランド氏溝のそばの大脳皮質の部分）の神経細胞および神経線維の髄鞘化は、すでに生後数ヶ月で徐々に進行してくることは、幼児の行動の発達が生得的に備わった能力にある脳の部位が対応していることを示しているし、また総合的な判断や、善悪の判断や、意志の力などに関与している機能は、大脳の前頭葉やその下方にある嗅脳の部位に関係があるといわれている。

すなわち行動、情緒、意志などの発達は多分に大脳の各部位および、それらをむすびつける聯合領の成熟に対応していることが知られている。これらは個体の成熟に関する個体発生の面であるとするならば、脳の他の部位、すなわちより原始的な発達段階にある哺乳動物でも、基本的には同じ構造と機能を持っている脳幹部、視床下部などの、体質や自律神経機能に関係の深い部位の成熟は系統発生の面

をあらわしているわけで、数万年前の人類と本質的には異なっていない。ネアンデルタール人、クロマニヨン人、ベキン原人など、人類の発展をさかのぼると一万年に足りない期間に急激に発達し、現代社会に適応してきた大脳の発達に対して、現代人が、古代の人類と大差のない感情、情緒の発達に止まっていることを示唆しているわけである。このことは幼児の保育が一方では人生の芽生えの時期に、その成熟段階に即したしつけにむけられるべきであるとともに、他方では元來人類が現代でも保持している原始的な性情を肯定して進められるべきであることを、ともに示している。

(3) 教育の可能性

前にのべたことだけでは人間の資質・素質・性格の基盤はすでに出生時にきめられていて、教育による個性の成長はごく限られてしまっているように誤解しかねないことになる。はたしてそうだろうか。遺伝といい、脳の成熟といっても、それはあくまで性格の基礎構築の一部を示したものであるにすぎない。問題はむしろその上につくられる骨組みの構造・内装・インテリアなどである。すなわち気

質をよくも悪しくも、どの方向にのぼしていけるかということ、すべて幼い時期の人間関係、しつけ、生活指導を通して、他人・保育者・親の指導、およびそれらを子どもが心のなかで受け入れていく過程で養われていく。ただその教育の仕方、個々の子どもに対するアプローチには、上述の基盤が敵として存在し、限界を設けていることは否定できない。したがって個々の子どもをみる目は、ある年齢の平均的な子ども像に対するだけでなく、十人十色の子どもの特性に対して同時に注がねばならない。

(4) 子どもを見る目

そこで、「子どもを見る目」がくもっているかどうか重要なことになる。われわれがこんな子どもに育てたいという願いをもって子どもに接するときに、無意識にさまざまな気持ちがあるか考えてみよう。

a 普通という意味での平均概念

行動・動作の点であまり極端でないもの、すなわち、あまり乱暴でもないし、あまり引込思想でもないという意味で、なるべく普通の子どものイメージをもって子どもに接

しているわけであるが、このいわゆる平均的な像からずれていると、事の当否はさておき、やはり集団の保育では問題にせざるをえない。しかし、「普通」でない行動がすなわち異常であると簡単にきめてしまうわけにはいかないし、またそれらをかならずしも治さねばならないともかぎらない。

b 困った行動という意味での適応概念

集団保育では、一般的にいつて、非社会的な、おとなしすぎるほうが、積極的・活動的すぎて問題をおこす場合に比して、目立たないし、つい見過しがちになる。しかしこの両者の行動を比較してみるとむしろ他人を困らすことのない子どもたちのほうが、より重大な問題をはらんでいることが多い。

c 病的という意味での疾病概念

「自閉症」とか「緘黙症」とか「神経症」というようなことは割合気軽に用いられる。この場合、ある疾病という意味で小児科・精神科で医学用語として用いられる場合とは多分にニュアンスが異なり、むしろ単にある行動や動作の偏った状態を指しているようであるが、元来疾病とは原因・症状・診断・治療・予防という一連のつながり

のなかで、かなり厳密に定義されるべきものであり、あまりルーズにこれらの用語を用いることは、保育態度を混乱させる意味でも望ましくない。しかし、それにしても、自閉的・神経症的な行動になると、本当に病的なものとして治療の対象とすべきか、単なる一時的な行動の特徴として問題にしないほうがよいのか迷うことが少なくない。疑わしい時に専門医に相談することは当然であるが、同時にそれによって、子どもに教育者・保育者として接することをやめてしまうことは、子どもにとって決してよいことではない。

d 可能性を認める意味での発達概念

子どもののびていく姿はまことに多様・多彩である。三歳児の反抗は四歳児の従順に、五歳児の積極性に、さらに六歳児の規則正しいことを好むという傾向に変化していく。その時々々の年齢特徴と、個人差をみつめる時に、まさに保育者の目が開かれるおもしろいことがある。ひとりの行動発達の特徴は、前述した素質的・遺伝的特徴と表裏一体をなして、めまぐるしく変貌していく。しかし、五年・十年とみていくと、その個人にとって最も適した道を子ども自身がえらんで進んでいったのだということがわか

る。個々の子どもの成長の能力はそれほどすばらしい。その道すじをゆがめることのないように、消極的に見るよりも、より積極的な面に目を注いで、いたずらに気づかないと過保護によって神経質的な傾向を助長しないように心がけることは、保育者の務めであるとともに、そのような姿勢がとれるかどうかは、むしろ保育者自身の人間としての生き方にかかわってくるであろう。

(静岡大学教育学部)

